

## W-3

### シネクドキの世界：カテゴリー化の言語学

#### ワークショップの構成

司会：西村義樹(東京大学)

コメンテーター：西村義樹(東京大学)、山泉実(大阪大学)

発表者：田中太一(東京大学)、佐藤らな(東京大学)、松田俊介(東京大学)、浅岡健志朗(東京大学)

[1]趣旨説明：司会者による趣旨説明 5分

[2]研究発表：発表者による研究発表 各20分

- (1)田中太一 「提喩とカテゴリー化：提喩能力をめぐる」
- (2)佐藤らな 「自己比喩とカテゴリー化：「にすぎる」と「にすぎない」の否定的評価」
- (3)松田俊介 「提喩、隠喩、事象構造：日本手話の使役の記述を通して」
- (4)浅岡健志朗 「全体と部分、グループとメンバー、類と種：  
チェコ語の HAVE, BELONG, BE を通して」

[3]コメント：コメンテーターによるコメント 20分

[4]全体討論：会場からの質疑応答・総括 15分

#### 企画趣旨

佐藤信夫(1978)は、**提喩**(シネクドキ)に換喩(メトニミー)とは根本的に異なる独自の地位を与え、日本ではその考えを引き継いでいる論者も存在する(瀬戸賢一、靱山洋介、森雄一など)。しかし、国外では提喩を換喩の下位分類とする見方がいまだ根強いほか、日本においてさえも佐藤の研究が十分に理解されているとはいいがたい。

そこで本ワークショップでは、**今一度提喩に光を当て、レトリック研究に新たな方向性を示す**。具体的には、認知言語学の観点から提喩とその他のレトリックを比較することによって、**提喩の独自性を再確認するとともに、プロトタイプ、捉え方、全体部分関係、包摂関係など、カテゴリー化に関わる現象について従来にはない視点を提示する**。さらに、この視点からコピュラ文やヴォイスなど他の現象の分析も試みる。その際、特に問題になるのは次の3点である。

#### ■ 提喩とカテゴリー化の関係

提喩はカテゴリーの上位/下位関係に基づく比喩であるという事実は、提喩にとって単なる定義以上の意味を持つ。私(たち)は、世界の中の対象を絶えず分類しており、提喩の萌芽はその働きの中に既に現れている。第一発表では、個体の名前をカテゴリー名にする提喩および下位カテゴリーで上位カテゴリーを表す提喩を分析し、代表例を中心としてカテゴリーを形成するカテゴリー化能力の臨時的な現れをその基盤としていることを明らかにする。

人間の知識において、単一のカテゴリーであってもその内部は決して均質ではない。第二発表では、佐藤信夫(1986)の記述を手がかりに、「犬も(所詮は)犬にすぎない」などの自己比喩と価値評価の関係論じ、「にすぎる」にも「にすぎない」にも否定的評価が伴うという事実を、カテゴリーの中心か周縁かという評価軸と、特別かそうではないかという評価軸という異なる基準を用いているためであると示す。自己比喩は提喩的關係に基づくものであり、提喩研究の重要な一部であると考えられる。

## ■ 提喩を用いる動機

提喩の働きを明らかにするために、その使用動機を探るのは有効な手続きであろう。第一発表では、カテゴリー名を個体に適用する提喩を分析し、ある対象が、対象それ自身の性質や概念化者の状態によって、そのカテゴリーの典型例と異なると判断されたために、より上位のカテゴリーを介して提示することがその使用動機であると示す。

第三発表では、日本手話の使役構文を分析し、下位カテゴリー（例：刺し殺す）によって、上位カテゴリー（例：殺す）を表すという使役構文が慣習化しているという事実を、日本手話の持つ最大の特徴の一つである類像性（iconicity）によって説明する。日本手話で類像的に何かを表現する際には、「世界で行われる身体動作」が「話し手の身体に対応付けて表現される」。そのため、使役構文では対象への働きかけと対象の変化をどちらも言語化するのが極めて自然な手続きであり、抽象的な働きかけという上位カテゴリーを表す際には、下位カテゴリーの内でもっとも慣習性の高いもの、すなわち無標であるものが用いられる。つまり、日本手話は上位カテゴリーの不在を下位カテゴリーで埋め合わせる戦略をとっていると考えられるのである。

## ■ 認知的な言語研究の2つの目的——認知形而上学という考え方

言語学の目的が言語記号の振る舞いを予測すること（のみ）にあるならば、予測に用いられる「性質」は言語記号の振る舞いと独立に定義できるものでなければならない。そのため言語記号の振る舞いによって、ある「性質」の有無を判断することは循環として批判の対象となる。しかし、言語記号の振る舞いを手がかりに、私（たち）に直感的に把握されているように思われる「性質」を観察可能なものにするのもまた、言語学の役割ではないだろうか。

認知言語学では意味は概念の一種であると考える。この想定が妥当なものであるならば、言語と概念の間には、言語についての理解が深まることは概念についての理解が深まることであり、概念についての理解が深まることは言語についての理解が深まることであるという相補的な関係が存在することになる。本ワークショップでは、すべての発表を通じてこのような認知形而上学とも言える観点からの理論的探求が可能であるのみならず、極めて有益であると示すことを目標の一つとしている。このことを最もよく体現しているのは第四発表である。ここでは、まず、提喩や換喩の基盤となると考えられる「全体と部分」「類と種」という関係それ自体について、概念的な考察を行い、どちらも推移的かつ非対称的な関係であることを示す。次に、チェコ語の HAVE、BELONG、BE の振る舞いを観察し、「グループ・メンバー」関係を手がかりに考察を進めることで、典型的な全体部分関係は、組織・メンバー関係と「ひとまとまりの対象とそれを構成する部分」の関係であるという点で共通し、組織・メンバー関係は、集団・メンバー関係と「一定の空間的構造をもたない全体と部分」の関係であるという共通点をもつこと、組織・メンバー関係と集団・メンバー関係は、「あるタイプの複数の事例」という共通の意味的基盤によって包摂関係と結びついていることを明らかにする。

## 参考文献

佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社。

佐藤信夫（1986）『意味の弾性』岩波書店。